

平成 29 年 5 月 23 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770020

研究課題名（和文）パーニニが言及する重複現在語幹動詞の研究

研究課題名（英文）Study on the reduplicated present taught by Panini

研究代表者

尾園 絢一（OZONO, Junichi）

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：90613662

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：インド最古の文法書『パーニニ文典（アシュターディーヤーイー）』を残した文法学者パーニニ（紀元前4世紀）が定式化する言語を古インドアーリヤ語（いわゆるサンスクリット）の歴史的展開の中に位置づけることはインド学における長年の課題であった。そこで課題の達成を目指して、本研究はパーニニが教える動詞語幹形成法、特に重複現在語幹形成法を古インドアーリヤ語の古層（ヴェーダ語）の実例と照合し、文法学者パーニニがどの文献にみられる語形・語法を念頭において文法規則を立てたのかを調査、同定した。

研究成果の概要（英文）：This study examines Panini's Grammar in light of the development of Old Indo-Aryan, and focuses on reduplicated present stems taught in Panini's Grammar, which were examined on the basis of linguistic facts in Vedic literature. In this research project, reduplicated present stems arising from application of Panini's grammatical rules were compared with the Vedic reduplicated present formations, and linguistic facts on which Panini's rules were based were elucidated.

研究分野：インド学

キーワード：重複現在語幹 パーニニ ヴェーダ 古インドアーリヤ語 第3類動詞群

## 1. 研究開始当初の背景

紀元前4世紀に活躍したパーニニが著した文法書『パーニニ文典 (アシュターディヤーイー)』を古インドアーリヤ語 (サンスクリット) の歴史的展開の中に位置づけることは長年の課題である。特にバラモン教聖典「ヴェーダ」の言語は、古インドアーリヤ語の古い段階を示しており、インド・ヨーロッパ語比較言語学における第一級の史料であると同時に、『パーニニ文典』を言語史的に位置づける上で最重要資料である。ヴェーダとパーニニの比較研究は Thieme, Renou 等によって取り組まれたが、今日までの研究の進展に照らして、全面的にやり直す必要がある。

近年ヴェーダ学、インド・ヨーロッパ語比較言語学の分野において、文法研究、特に個別の動詞カテゴリーに関する網羅的研究書の出版が相次ぎ、研究が飛躍的に進展した。重複カテゴリーについて言えば、Schaefer, *Das Intensivum im Veidschen* (1994), Kümmel, *Das Perfekt im Indoiranischen* (2000) 等による基礎研究がある。また全ヴェーダ文献のインデックス Vishva Bandhu, *Vedic Word Concordance* (1947-) を用いることにより、ヴェーダの用例を徹底的に調査することが可能になった。これまで、本報告者は主にヴェーダ語の重複語幹動詞をパーニニが教える語形と照合しながら、パーニニが念頭においていた事実を解明することに取り組んできた。関連分野における蓄積、そして本報告者のこれまでの研究成果を基に『パーニニ文典』の実像解明に本格的に取り組む得る段階に達した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、パーニニ文法を歴史的展開に位置づけることである。目的を達成するためにパーニニが言及する、又はパーニニ文典から推定される重複現在語幹動詞をヴェーダの用例と照合し、パーニニが規則を立てる上で念頭に置いていた言語事実を明らか

にするという作業を積み重ねる。またインド・ヨーロッパ語比較言語学、ヴェーダ学、パーニニ文法学等の諸領域で達成された最新の成果を活用しながら、『パーニニ文典』の言語史的な位置づけ、実体解明に取り組み、同文典を信頼できる資料としてインド学、言語学に提供することを目指す。

## 3. 研究の方法

パーニニが定式化した言語はヴェーダ語から古典サンスクリットへの過渡期 (Post-Vedic, spätvedisch) に位置づけられ、古インドアーリヤ語がブラーフマナ文献の時代までに受けた重要な変化を全て経た後の姿を示している。古インドアーリヤ語の展開を考慮に入れながら、重複現在語幹形成の体系的な考察を行い、ヴェーダ語における重複現在語幹形成法の展開を確認する。先ず重複現在語幹形成、およびその可能性が考えられる重複語幹を Whitney の動詞語幹一覧を用いて、リストアップし、それらを純粹に形式的観点 (語根構造、重複の仕方等) に従って分類する。それらをヴェーダ文献 (リグヴェーダ、アタルヴァヴェーダ、ヤジュルヴェーダ、ブラーフマナ、ウパニシャッド、シュラウタストラ) の用例に基づき精査する。また完了語幹の過去形 (pluperfect) や話法形 (modal form) を介して2次的に作られた重複現在語幹については Kümmel, *Das Perfekt im Indoiranischen* (2000) 等の先行研究を利用しながらヴェーダ語の用例を調査する。

ヴェーダ語の重複現在語幹形成法の基本的枠組みを把握した後、本研究の中核となる調査にとりかかる。具体的には *juhoti* 以下の (第3類) 動詞群に分類される、25の動詞語基から導き出される重複現在語幹を Vishva Bandhu, *Vedic Word Concordance* (1942-) を用いてヴェーダの用例と比較し、パーニニが実際にどのような、又はどの時代の言語事実を予定して規則を立てたのかを明らかにする。動詞語基リスト『ダートゥパータ』の

第3類動詞群の中、DhP III 14–25の動詞語基は専らヴェーダ語において用いられるとされているが、この中の半数近くは、現在語幹以外、つまり完了語幹の話法形や意欲語幹であり、重複現在語幹として登録されるに至った事情をヴェーダの用例に基づいて明らかにする。

重複現在語幹、重複に関する文法規則 10 に対する標準的注釈書の議論を読み解くことを中心に研究を進める。先ず、『パーニニ文典』の規則のパラフレーズの注解『カーシカーヴリッティ』、パタンジャリ『マハーバーシャ』の見解と例を調査する。次にバトタージディークシタ『シッダーンタ・カウムディー』等の教本、『クシーラタランギー』等の『ダートゥパータ』の注釈書類に見られる記述や語形も可能な限り収集・分析し、個々の語形を導き出すためにいかなる規則が適用されるのかを明らかにする。最終的にはパーニニが教える重複現在語幹の共時的姿を再構成することを目指す。

#### 4. 研究成果

ヴェーダ文献に現れる重複現在語幹を一つずつ調査し、個々の語幹の歴史的展開とパーニニが教える語幹形成法と照合した。その結果を基に規則を立てる上で念頭に置いていた言語事実の同定に取り組んだ。ヴェーダ語の動詞 *rā*「与える」の重複現在語幹 *rā-r-* とアオリスト語幹 *rās-* の全用例を精査し、活用表 (Paradigma)、機能、統語レベルにおける分担関係、*dā*「与える」との補完の可能性に関する考察を行った。*dhā*「置き定める」の重複現在語幹、意欲語幹のヴェーダにおける用例を調査し、パーニニが定める語幹形成法と照合し、パーニニが規則を立てる上で念頭に置いた事実を明らかにした。完了語幹 (perfect)、強意語幹 (intensive) から2次的に作られた重複現在語幹動詞のヴェーダ語の用例を精査し、パーニニが挙げる語形と照

合し、パーニニ (Pāṇ. VI 1,92, VII 4,75) が念頭に置いていた事実の同定に取り組んだ。

また、一つの活用表 (paradigm) を複数の異なる語幹が担う現象、補充法 (suppletion) はインド・ヨーロッパ語比較言語学における重要課題であるが、この補充法はパーニニ文法が前提とする動詞組織においても重要な役割を演じる。そこで *ad* と *ghas*「食べる」という2つの動詞についてヴェーダの用例と比較しながらパーニニが前提としていた、動詞の交替および活用表の解明に取り組み成果を挙げた。

『マハーバーシャ』に見られる動詞、特に意欲語幹に関する議論を広島大学を中心とする専門家の協力を得て読解し、成果の一部を公開した。

また、ヴェーダ語の重複語幹が列挙されている規則を調査する過程で、現在語幹 *śrāyati*「熱くなる」がラテン語 *caleō*「熱い」に対応し、インド・ヨーロッパ祖語に遡る語幹 (*\*kl-eh<sub>1</sub>-je/o-*) の可能性があることが判ったため、この問題について調査を行い、国際ワークショップ (ウィーン) にて発表した。

#### 5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1) 尾園 絢一 「Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 の研究 (3)」『中央学術研究所紀要』第45号、中央学術研究所、pp. 177–192, 2016年11月、査読無。

2) Junichi Ozono “Verb suppletion and Pāṇini’s Grammar: on the alternation between *ad* and *ghas*” *Vyākaraṇaparipṛcchā: Proceedings of the Vyākaraṇa section of the 16th World Sanskrit Conference*, pp. 265 – 289, DK Publishers Distributors Pvt. Ltd., New Delhi, 2016年9月、査読有。

3) 尾園 絢一「パーニニ文法における補完システム：*ad* と *ghas* の交代をめぐる問題」『印度学仏教学研究』第 65 巻第 2 号, pp.246–251, 2015 年 3 月, 査読有.

4) 尾園 絢一「Mahābhāṣya ad Pāṇ. III 1,7 の研究 (2)」『東北大学文学研究科研究年報』第 64 号, pp. 101–117, 2015 年 3 月, 査読無.

5) 尾園 絢一「正しい言葉 (*śabda-*) — ヴェーダとパーニニ文法学の立場から —」『論集』41 号, pp. 77–104, 2014 年 12 月, 査読有.

[学会発表] (計 7 件)

1) Junichi Ozono “*Ai. śrāyati* und lat. *caleō*: Zu einem Fortsetzer der uridg. *\*-eh<sub>1</sub>*-Bildung im Altindoarischen” 印欧語学会 (Indogermanische Gesellschaft) ワークショップ「印欧祖語の語根拡張 (Proto-Indo-European Root Extensions)」, ウィーン (オーストリア), 2016 年 9 月 18 日.

2) 尾園 絢一「古インドアーリヤ語 *j<sub>1</sub>mbh*」印度学宗教学会第 58 学術大会, 2016 年 5 月 29 日, 郡山女子大学 (福島).

3) 尾園 絢一「パーニニが教える意欲語幹 (Desiderativ) 形成法 — *dīpsati* 等について —」第 6 回ヴェーダ文献研究会, 2016 年 3 月 27 日, 東北大学 (宮城).

4) 尾園 絢一「ヴェーダ語 *Präs. rār-*, *Aor. rā-s-*」第 5 回ヴェーダ文献研究会, 2015 年 10 月 31 日, 国際佛教大学院大学 (東京).

5) Junichi Ozono “Verb Spletion and Pāṇini’s Grammar: On the alternation between *ad* and

*ghas*” 第 16 回世界サンスクリット学会 (The 16th World Sanskrit Conference)。2015 年 6 月 30 日, バンコク (タイ).

6) Junichi Ozono “Die richtige Sprache: Aus dem Blickwinkel des Brahmanismus” Frühjahrstreffen mit “Butterbrot und Bier” ドイツ学術交流会 (DAAD) 主催, 2015 年 6 月 12 日, ドイツ文化会館 (東京).

7) 尾園 絢一「パーニニ文法における補完活用：*ad~ghas* に見られる問題」日本印度学仏教学会第 65 回学術大会, 2014 年 8 月 30 日, 武蔵野大学 (東京).

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]  
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾園 絢一 (OZONO JUNICHI)

東北大学・大学院文学研究科・専門研究員

研究者番号：90613662